

ジャワのバティックから インドネシアのバティックへ

——服飾文化から見た「^{ビンネカ・トゥンガル・イカ}多様性のなかの統一」の試み

Many multiracial countries agonize over how to unify their citizens. However, Indonesia has solved this issue through the use of dyed textiles called batik.

戸津正勝

Tozu Masakatsu

ハリウッド大学院大学アジア服飾文化研究所所長
国士舘大学名誉教授



はじめに

最初に、インドネシアの民族服飾文化と国民文化との関係について論じる前提として、世界最大の多民族国家であるインドネシアが抱えてきた国民国家形成の本質的な問題について概観しておきたい。

第二次世界大戦後、アジア・アフリカのほとんどの諸国家は、民族自立という近代的原理に基づいた民族独立運動の結果として、植民地からの独立を達成した。しかし、これらの国家ではいざ独立してみると、その民族は実態として必ずしも統一されていなかったし、またひとつの国民としての一体性に基礎づけられてもいなかった。そのため、これらの諸国家の大半が独立達成後最初に直面した最大の政治課題は、分裂状態にあった多様な民族を調和させ、ひとつの国民を創出することによって、近代的な「国民国家」を形成するというネーション・ビルディング (Nation-Building) の問題であった。しかも、その統合は急速に達成されるのでなければ、異なった宗教や文化の価値原理に基づいた諸民族間の対立・抗争によって、いつ国家の分裂を招くかわ

からないという危険性を内在していた。

このような状況が生み出された主要な理由として次の2点を指摘することができる。その第一は、それぞれの植民地領域が帝国主義諸国家相互の政治的・軍事的力関係によって、その地域の民族的・文化的同一性や歴史体験の共同性といったこととは無関係に決定されたことにある。第二は、数百年に及ぶ過酷な植民地支配の下に置かれたこれらの諸国家では、その歴史形成のなかで内発的・自立的な力を奪われてしまい、社会的・文化的・民族的統合への自然な発展を著しく妨げられたことである。

しかし、アジア・アフリカにおける諸国家の独立を西欧近代の必然的拡大と見做した当時の政治理論 (西欧化理論) は、このような状況に対する理解が十分ではなかったため、これらの諸国における「国民国家」の形成についてあまりにも楽観的でありすぎた。その結果、西欧近代で特有に発達した政党制や議会制などの民主主義諸制度導入は、これらの諸国家においては人々を国家に結びつける方向 (国民統合) ではなく、むしろ地方的・民族的なアイデンティティ (帰属意識) を強化させ、国家を分裂させ



©共同通信イメージズ

1994年、インドネシアのボゴールで開催されたAPEC首脳会議の最終日、各国首脳全員が王宮の伝統柄のバティックのシャツを着用して登場し、世界の注目を集めた。

る方向でしか機能しなかったのである。

1950年代、インドネシアにおける西欧型憲法体制が崩壊するに至ったのは、その典型的な事例であった。初代大統領スカルノは、多民族国家インドネシアにおける国民統合の困難さを当初から見抜いていた。彼はインドネシア共和国が国民統合を達成するためには、インドネシアの伝統的価値原理（ゴトン・ロヨン—相互扶助、ムシャワラー協議、ムファカット—全員一致）の上に立脚したものでなければならないとして、多数決という数の力で全てが決定される西欧型民主主義（1950年暫定憲法）を強く批判した。そして彼はそれぞれの伝統的共同体社会の下で分裂状態にあった諸民族を、インドネシア共和国という新しい運命共同体に結集させることを最大の政治課題として、強力な大統領権限を規定した1945年憲法を復活させた。

「ビンネカ・トゥングル・イカ（Bhinneka Tunggal Ika—多様性のなかの統一）」は、まさにこのようなスカルノの思想を集約した国家理念であった。彼はこの理念の下に、強力な政治指導力を発揮して地方的な存在でしかなかった多様な民族文化をナショナリズムの枠組みのなかに再編成しようとしたのである。スカルノはその代表的具体例として、ジャワの

民族服飾としてのバティックに注目し、それを国民文化にまで高めようと試みた。問題は、どのようにすれば、民族ごとに分裂している多様な文化に調和を与え、ある特定の民族の伝統文化をインドネシア人全体が共有できる国民文化へと発展させることができるのか、そのための具体的方策とは何かということにある。

その意味で、第二回アジア未来会議が総合テーマとして掲げた「多様性と調和」は、まさにインドネシアが独立以来追求し続けてきた国家理念そのものである。このテーマに込められた問題意識を前提として、ジャワの服飾文化であったバティックがどのようにしてインドネシアの国民文化へと発展を遂げてきたのかという点を中心に、多民族国家における国民文化形成の課題について考察を行いたい。

1. 民族文化の多様性とその服飾文化

(1) インドネシアにおける民族文化の多様性の要因とその問題点

インドネシア共和国は、旧オランダ領東インドを基盤に1945年8月17日、日本の敗戦と共に独立の産声を上げた。国土は赤道をはさんで南北1880km、東西5100kmにわたって散在する大小1万7000以上もの島々からなる世界最大の島嶼国家である。人口は現在約2億5000万人で世界第4位の人口大国である。そしてその人口の半分以上は、全面積の1割にも満たないジャワ島に集中している。住民の多数はマレー系であるが、各島々には300以上といわれる民族が存在している。主要な民族としては、アチェ、バタック、ミナンカバウ、ランポン、スンダ、ジャワ、マドゥラ、ダヤク、マカッサル、ブギス、トラジャ、メナド、バリ、ササク、スンバワ、フローレス、スンバ、チモール、パプアなどがあげられる。これらの民族は数千年にわたる長い共同体社会の歴史のなかで固有の文化を育んできたため、それぞれの地域で異なった言語、慣

習法 (Adat)、社会構造をもっており、その性格も多様である。このような土着文化は、現在でもジャワを始めとするインドネシアの全ての地域に色濃く残っており、インドネシア社会において欠くことのできない重要な構成要素となっている。とくにそれは、各地域の村の伝統儀礼、あるいは伝統的工芸や芸能のなかに今なお生彩を放っている。(地図1)

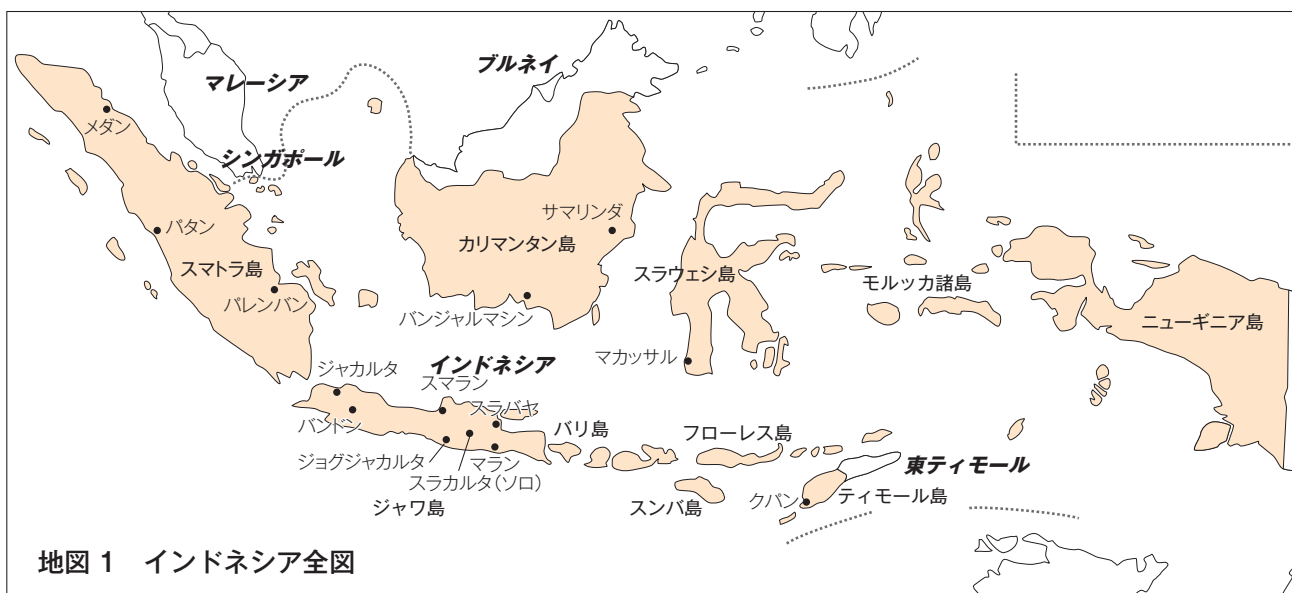
しかし、インドネシアの文化的多様性は、以上のような民族的多様性のみ起因しているわけではない。インドネシア各地においては、その歴史形成のなかで、ヒンドゥ文化、仏教文化、イスラム文化、西欧文化(キリスト教文化)といった外来文化がつぎつぎと到来し、それらは土着の基層文化の上に様々な形で重層的に受容されたため、各々の地域ではさらに複雑で多様な文化変容を遂げることとなった。とりわけ、オランダの植民地支配は「分割統治」の原則を採用して、地域ごとに異なるアダット(Adat—慣習法)を保護・温存することによって民族間相互の対立をあおり、統一言語の発達を妨げたため、その傾向を一層強めることとなった。また、インドネシアの歴史全般に中国文化からの影響も少なくない上、商業活動に大きな実権をもっている華

人(中国人・総人口の約3.5%)の存在も無視できない。その上、短期間ではあったが、強烈な日本軍政時代をも経験する。

以上のように、インドネシアの民族文化は驚くほどの多様性と複雑さをその内に秘めている。そのため、独立後のインドネシアは民族の多様性を原因とする深刻な対立と分裂に直面してきた。とりわけ人口で圧倒的多数を占めヒンドゥ色が強く残るジャワ世界と、面積の広さや天然資源の豊かさに圧倒的であるイスラムやキリスト教色の強い外島(ジャワ島以外の島々)との古くからの政治的・文化的対立は今日でも主要な政治問題となっている。

(2) 民族服飾の性格

インドネシアの民族的・文化的多様性は、当然そのままその服飾文化にも反映している。前述した主要民族のみならず、それ以外の多くの少数民族もその風土と歴史のなかでそれぞれが独自の民族服飾を発展させてきた。そのため、インドネシアは「民族服飾の生きた博物館」であると形容できるほど、その素材、染織技法、色彩、文様、服飾形態は多種多様である。



地図1 インドネシア全図

民族服が民族共同体の文化の反映であるとするれば、それは、誰が、いつ、どこで、どの様な種類の衣装を着用すべきかといった、その民族共同体の慣習 (Adat) 及び信仰などに関連した社会規範と密接に関係づけられてきた。民族服は、第一に王侯貴族と庶民という身分制と結びついてきた。第二に、それは、誕生、割礼、成人、婚約、結婚、妊娠、死といった人生上の慶弔の儀礼と結びついていた。第三としてあげられるのは、農村共同体の伝統儀礼との結びつきである。第四としてそれは、祖先崇拜や自然崇拜といった古代からのアニミズム信仰の儀礼とも密接に結びついていた。今なお地方では、ある特定の服飾やその文様は悪霊を祓^{はら}ったり、病気を回復させたりといった着用者を守護する呪術的な力があると信じられている。したがって、このような文化的基盤の上に成立した民族服は、たんなる個人の好みによる衣服というよりは、ある特定の民族共同体の秩序体系とその精神を直接に反映する象徴的存在として、各儀礼において欠かすことのできない重要な構成要素となってきた。

その結果、民族服は民族を代表する文化として、必然的に着用者の心理に対して、その民族共同体への帰属意識や心理的一体感を高めるというアイデンティティ機能をもつ。他方でそれは自民族以外の民族やその文化に対してそれを拒否するという着用者の心理的傾向をもたらすことになる。多様な民族服の存在は、それだけインドネシアの国民統合の困難さを示している。

なお、ここで現代インドネシアを代表する服飾として幅広く着用されるようになっている「バティック・クバヤ」について簡単に説明を加える。この服飾は元来ジャワ島を中心に発達してきたものであるが、その特徴はカイン・パンジャン (長い布の意味) と呼ばれるバティック (ロウケツ染) の布を巻きつけた腰衣とクバヤと呼ばれる長袖のブラウスが上着として着用されることにある。また男性はバティック布によるシャツを着用するのが一般的である。その詳しい内容については次章以降で考察する。(図2)

図 1



図 2



図 1. ジョグジャカルタ王宮における男子の正装である。

図 2. 庶民の女性の正装で、バティック・クバヤと呼ばれる。クバヤは上着で刺繍が施される。

(3) 外島における民族服飾の特徴

ジャワ島とそれ以外の島々の総称である「外島」との間に見られる文化的相違は、当然服飾文化の上にも反映している。それは服飾の素材、染織技法、文様、色彩、服飾の形態等において一見すればすぐにそれと分かるほど対照的である。ジャワの服飾がバティックと呼ばれるロウ緞染による布を中心に構成されるのに対して、外島における多様な民族の服飾は主として織による布によって構成されてきた。織布の種類は、その織の技法によって、イカット (Ikat—^{かすりおり}絛織)、ソンケット (Songket—縫取織)、浮織、縞織、紋織など多様である。民族によってはそれらの技法が一枚の布のなかに合わせて織られることも多い上、なかには刺繍も施されるため、織布はさらに多様な種類に分けられる。糸の素材としては綿、絹、麻、パイナップル、バナナその他、水草の茎も利用されてきた。金糸、銀糸についてもソンケット、タピス、リマールと呼ばれる織布などに幅広く使用されてきた。またタパ (Tapa) と呼ばれるもつ

とも古い衣料である樹皮布も今なお制作している地域がある。

織によって表現された文様と模様は民族によって様々であるが、自然崇拜や祖霊崇拜を基本としたアニミズム的性格を反映するものが多い。その代表的なものはイカット (Ikat) と呼ばれる緋織で、それには経緋、緯緋、経緯緋がある。とくに綿による経緋 (イカット) はパプア州 (ニューギニア島西部) 以外の外島の各地で幅広く見られる。とりわけ、スマトラ島のバタック地方、カリマンタン島内陸部、スラウェシ島のトラジャ地方、フローレス島、スンバ島、チモール島、アロール島、ロティ島、サウ島などキリスト教色の強い地域に住む民族の文様においては、戦いで獲得した敵の首を木にさらした首架模様をはじめとして、蛇、ワニ、トカゲ、亀、ニワトリ、馬、牛、鹿、といった動物文や人物文など、土着のアニミズム文化の色彩を強く反映している。(図3～7)

これらの文様を表現したイカットはイスラム教が偶像崇拜を禁止しているため、90%がイスラム教徒であるインドネシアでは全国的に流通するには大きな制約が認められる。それ以外の文様や模様を表現したイカットとしては、各民族の基層文化とインド、イスラム、中国、西洋からの外来文化との融合あるいはその影響によると思われるものが広汎に見られる。とくに、インドのグジャラート州で制作された経緯緋の絹布であるパトラ (Patola) の模様は、外島における貴族用として各民族のイカットの文様と融合している。(図5)

このように多様な織物が外島の少数民族の長い歴史のなかで衰退することなく継承され、発展を遂げてきたのはどのような理由によるのであろうか。その最大の理由は、民族服飾が各民族のアイデンティティ形成にとって大変に重要な役割を果たしてきたことにある。1970年代の後半から80年代にかけて、スマトラ島、カリマンタン島、フローレス島、スラウェシ島、スンバ島、チモール島、ロティ島等、私が外島を訪問したその村々では、高床式の家

屋の軒下で女性たちが素朴な腰機で織りをする姿がごく普通に見ることができた。それは、各家庭で自足用、儀礼用として、何世代にもわたって脈々と母から娘へ、民族服飾の制作技術が受け継がれてきた姿であった。しかし、近年の大きな社会変化のなかで、今ではその技術の継承は困難となっている。このことは裏を返せば、各民族のアイデンティティが危機を迎えている姿とも考えられる。

このような状況の進展に対し政府は、諸民族の伝統文化を、国民国家を前提に、それを支える国民文化の基盤としての地方文化へと転換を促そうという政策を近年強く推進するようになってきている。民族アイデンティティから国民アイデンティティへの転換が図られているのである。後に詳しく述べるジャワのバティックに対する「国民文化」化政策の推進と同様に、外島の民族服飾についても、国民アイデンティティへの転換が図られているのである。民族世界のなかで独自に発達を遂げてきた外島の民族服飾は、今では大消費地であるジャカルタやスラバヤといった各都市の巨大なショッピングモールや大きなイベント会場で開催される「伝統工芸博覧会」にインドネシアの誇る「地方工芸品」として出品され、各地方、各民族間でその出来ばえを競い合っている。社会の近代化による外島内部における民族文化の弱体化が進む中で、消費文明の発達が伝統的な外島の織物にその活性化の可能性の道を開き始めている。それはビンネカ・トゥンガル・イカ (Bhinneka Tunggal Ika—多様性のなかの統一) という国家理念に基づいた、ナショナリズム政策による「民族文化の地方文化」化現象として捉えることが可能である。

なお、先に述べた外島のイカット (Ikat- 現在では緋、緋織物の世界共通語となっているが、元来インドネシア語で括る、結ぶ、を意味する用語) は、その技術の歴史の古さ、民族的・文化的背景の多様性、その種類の豊かさ等、どれをとっても世界的な文化遺産と呼ぶに相応しい。もしイカットがバティックと同様に世界無形文化遺産に認定され



図3

図3. フローレス島のイカットで、「BINEKA TUNGGAL IKA」という文字が織られている。

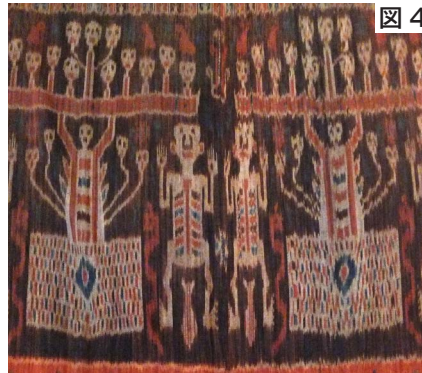


図4

図4. スンバ島のイカットで、世界的に有名な「首架文様」のモチーフである。



図5

図5. このロティ島のイカットはインドのパトラ文様が中心である。

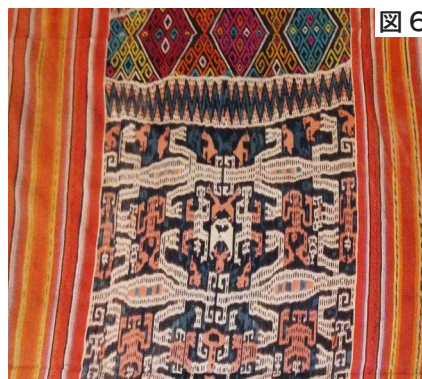


図6

図6. チモール島のイカットには、トカゲの文様が多い。



図7

図7. スラウェシ島のイカットでは、水牛のモチーフが多い。

ば、驚く程広大な海域に散在する数多くの島々の何百という民族にとって、彼らの伝統織物に対する新しい価値の再発見とそのアイデンティティは大きな高まりを見せると思われる。「ビンネカ・トゥンガル・イカ」の国家理念とその精神の具体化のためにも、その実現を大いに期待したい。

2. ジャワ島内陸部におけるヒンドゥ・ジャワ文化と王宮パティック

(1) ヒンドゥ・ジャワ王国の歴史的概要

紀元1世紀から3世紀にかけて、ジャワやスマトラを中心に、インドから宗教（ヒンドゥ教・仏教）、言語（サンスクリット語）、文学、美術、建築、統治制度などがもたらされた。7世紀後半にはスマトラのパレンバンを中心に仏教国スリヴィジャヤ（Srivijaya）王国が誕生し、その支配権はマレー

半島やジャワにも及んだ。一方、ジャワでは、8世紀半ばにジャワ島中部でマタラム（Mataram）王国が誕生し、プランバナンを始めとするヒンドゥ寺院群を建設した。また、スリヴィジャヤの影響下で同じくジャワ島中部ではサイレンドラ（Sailendra）王朝が成立し、世界最大の仏教遺跡として有名なチャンディ・ボロブドゥールが建てられた。その後、ジャワではマジャパヒト（Majapahit）王国（1293 - 1520年頃）が全盛期を迎えるまで、ヒンドゥ王国の伝統が続いた。

このような長い歴史過程のなかで、外来文化としてのインド文化はジャワ土着の伝統文化と混交して変容し、ヒンドゥ・ジャワ文化といわれる今日の共和国の基盤となる文化が成立するのである。ヒンドゥ・ジャワ文化はクラトン（Kraton - 王宮）を宇宙の中心とするジャワ独自の価値体系を基礎としていた。そこでは、王宮の権威は、軍事的・政治的活動によって維持されるというよりは、王宮が文化

と芸術の中心であるという点に由来した。その結果、ジャワ独特の王宮文化が多様な発展を遂げていくのである。

15世紀から16世紀になると、インドやアラブの商人を通じてイスラム化の波が押し寄せてくるようになり、マジヤパヒト王国は次第に衰退し始める。ジャワのイスラム勢力は、16世紀前半にはドゥマック (Demak) 王国がジャワの覇権を握り、それが西ジャワのバンテン (Banten) 王国に受け継がれるのであるが、1575年、遂にジャワの内陸部に達して、ジョグジャカルタ郊外のコタグデの地にイスラム・マタラム王国を建てるに至る。ここにジャワはイスラム王国の時代を迎える。

しかし、ジャワにもたらされたイスラムはペルシャやインドで体系化されたスーフイズム (イスラム神秘主義) であったため、それ以前のヒンドゥ・ジャワ文化の理念とも容易に結びつく形で、いわば重層的に受けとめられた。そのため、ジャワの伝統的な文化はイスラムの影響によって衰退するどころか、過去との強い絆を維持したまま、より一層多様な展開を遂げていくのである。たとえば、ワヤン・クリット (Wayang Kulit - 影絵芝居) は、ジャワ古来の祖霊崇拜と、「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」といったインドの叙事詩とが結びついて物語が成立していたのであるが、それにイスラム神秘主義の理念が混入することで、その内容は大きく変容を遂げていく。また、バティック、彫刻、銀細工といった伝統工芸も、同じようにイスラムからの新しい影響を受けながらも、基本的にはヒンドゥ・ジャワ文化によるモチーフをそのまま保持しつづけた。

18世紀半ばになると、強大な勢力を誇ったイスラム・マタラム王国は、オランダの武力の下で「ギャンティの和議」(1755年)によって王家が分割 (ジョグジャカルタのスルタン家とスラカルタのスプナン家) され、1757年にはスラカルタの王家はさらに分割 (マンクヌガラン家) される。また、1817年にはジョグジャカルタの王家も分割 (パクアラマン家) させられた。

オランダにより武力と政治権力を奪われた四つの王家は、互いに文化の面で競い合い、古くからのジャワ伝統文化の復興を積極的に行うことによって、王権の正当性と権威の維持を図ろうとした。その結果、王宮間で文化の様式の微妙な差異を競いあうという状況が生じ、それぞれの王家で独自の異なった文化様式を生み出していくこととなる。バティックはその典型的な例である。

(2) 王宮 (クラトン—Kraton) の文化とそのバティックの特徴

ジャワの王宮文化をもっとも特徴づけているものとして、プリヤイ (Priayi) と呼ばれる王族・貴族階級特有の価値観をあげることができる。プリヤイは一般庶民と異なって、外面的で物質的な欲望よりも、精神的な高貴さといった内面的な価値の追求を人生の最大の目的とする。そのためプリヤイは、現世の多義性を神秘的に理解するための精神的訓練として、絶対的な自己抑制を試みる。このような努力によって、はじめて「アルス (Alus)」という重要な概念と結びついた高貴な態度が生み出されるのである。この「アルス」という概念は王宮文化を支える最も重要な価値観である。アメリカの文化人類学者、クリフォード・ギアツによれば「アルス」の内容は、一般に「上品」という概念に含まれる全てのものを意味している。たとえば、「純粹・洗練・高雅・丁重・精巧・靈妙・微妙・開明・平穩・調和」といったものが全て含まれている。そのため、王宮の芸術としての「アルス」芸術は長い歴史のなかでプリヤイによるこのような精神的訓練の結果として徐々に発展を遂げてきたのである。バティックは「アルス」芸術の代表的存在であった。

それに対して、アルスの反対概念である「カサル (Kasar)」は、プリヤイ文化のなかではもっとも非難されるべきである。とくに自己の欲望のため感情的になって人間関係の調和を乱したり、利己的で、世話になった人を裏切るような人物はそれに該当する。また、制作の技術レベルが低い村のバ



図 8



図 9



図 10

図 8. 王宮バティックを代表するバラン・ルサク文様のバティックである。

図 9. ソロのスフナン王家のバク・ブヴォノ12世であるが、図 8と同じバティックを着用されている。

図 10. 王宮バティックを代表する神秘主義モチーフであり、ヒンドゥ教の霊鳥ガルーダの羽が描かれている。

図 11. スフナン王家を代表するバラン文様である。

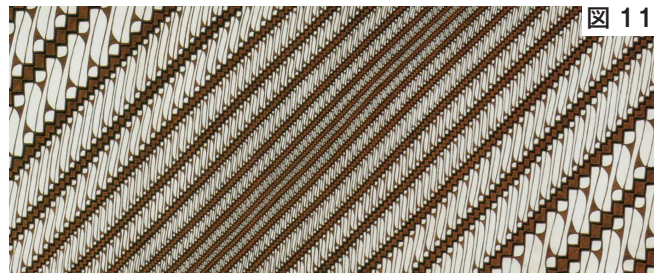


図 11

ティック等は「カサール」であると評価された。

王宮文化を支える重要なアールス芸術であったバティックは、古代ヒンドゥ・ジャワ王国の王宮（クラトン—Kraton）内で、王侯貴族（プリヤイ）の子女のみに許された高級技芸として、特別の保護の下におかれるようになる。それは、バティックの文様と模様を創作し、描き、染色するという数ヶ月もの制作過程がアールスな価値を生み出すための「偉大なる内心の集中」による精神的訓練と考えられたためである。そのため、ヒンドゥ・ジャワ文化の価値観の表現であるバティックの制作は、洗練された高い教養をもったプリヤイ階級に属する子女のみに可能な仕事であった。その結果、バティック制作の技術は次第に精巧なものとなり、そのデザインも芸術的なものにまで高められていったのである。このようにして、バティックのヒンドゥの文様は、ジャワにおける神秘主義的な意味が付与されると共に、新たに創作されたジャワの文様と融合していくのである。したがって、王宮のバティックの文様に見ら

れるヒンドゥ・ジャワ的価値観の反映という基本的な性格は、ジャワの古代王国がイスラム化されるより、かなり早い段階で完成していたものと思われる。バティックはまさに、ヒンドゥ・ジャワ王国の文化的中心としての王宮（クラトン）の権威のシンボルであった。（図 8～11）

(3) 庶民によるバティック制作と禁制文様の制定

しかし、プリヤイ階級という身分制と強く結びついて発達してきたバティックは、17世紀以降になると、一般庶民の間でも次第に制作されるようになる。とくにインドから大量の綿布が、チモール（Timor）島やスマトラ島のパレンバン（Palembang）からは蜜蠟みつろうが多量に輸入されて、バティックの原材料の価格を引き下げた。その結果、王宮の独占的工芸品で、その権威のシンボルであったバティックは一般庶民の間で幅広く制作されるようになる。さらに、バティックの一般庶民への普及を決定づけたのは、17世紀初頭に発見された茶色

のソガ (Soga) 染料によってである。その独特の茶色は、それまでの藍と白を中心とするバティックの色彩に大きな変化をもたらし、さらに、内陸部のバティックの中心地であったスラカルタ (ソロ) やジョグジャカルタの王宮バティックに重要な影響を与えることとなった。

王宮文様のバティックが一般庶民の間で幅広く制作されるようになると、王宮はその権威を守るため、王宮専用の文様を制定し、一般庶民に対してはそれを「禁制文様」として着用することを禁じた。王宮による禁制文様の制定という事実は、18世紀後半において王宮で創作された文様のバティックが一般庶民の間に広く普及していたということを示すとともに、その内容においても王侯・貴族階級と一般庶民との間に大きな接近がみられたことを意味した。言い換えれば、王族がその輝かしい権威を維持するためには、もはやバティックそのものでは不可能となったのであり、そのため王侯・貴族階級であることを示すシンボルとして、特別の意味をもった文様を独占するという方法によって伝統的な身分制の維持を図ったのである。

一方、王宮で生まれた禁制文様以外の多くの文様は、ジャワ各地の一般庶民に幅広く受容されていった。その結果、バティックの文様それ自体がもつ特別な意味は、それぞれの地域共同体の社会規範である慣習法的枠組みと密接に結びつけられていくようになる。共同体によって異なったバティックの象徴的な文様の鎖は、様々な共同体の儀礼と関係づけられるとともに、誕生、成人、婚約、結婚、妊娠、病氣、死といった庶民の全人生とも深く結びついていくのである。

このことは、王侯貴族の権威のシンボルであったバティックが、共同体社会の文化的シンボルへとその役割を拡大したことを意味した。それは、プリアイ哲学を表現した王宮芸術としてのワヤン (影絵芝居) が、村落共同体での庶民の生活の重要な構成要素となっていくのと似ている。バティックは、それぞれの地域共同体社会の慣習法的枠組のなかに秩序

づけられるとともに、共同体の構成者である一般庶民に愛され着用されることによって、地域共同体の文化的シンボルとして、多様な変容を遂げていくのである。たとえばバニユマス (Banyumas)、ウォノギリ (Wonogiri)、パチタン (Pacitan) など南部地方に数多くある個性的なバティック・センター (その地方特有の価値観を反映したバティック制作の中心地) は、まさにこのような意味で理解することができる。また、その影響は本来ジャワ文化圏外にあったスンダ地方のチアミス (Ciamis)、タシクマラヤ (Tasikmalaya)、ガルート (Garut) にまで及んだ。

3. ジャワ島北部海岸地方の文化とそのバティックの特徴

(1) 国際貿易都市と多様なバティック・センターの形成

ジャワ島はヒンドゥー・ジャワ神秘主義の伝統の強い山に囲まれた内陸部 (ジョグジャカルタ、スラカルタ) と、海のシルクロードに面して古くから交易の重要な要衝であった国際色豊かな北部海岸地方という、二つの異なった文化世界に大別できる。このことを、ジャワ人は昔から次のように表現した。

Adat datang dari gunung.

慣習は山からやって来る。

Agama datang dari laut.

宗教 (文化) は海からやって来る。

ジャワの北部海岸地方の諸都市は、15世紀から16世紀になると交易を求めてやって来る中国、アラブ、オランダ、ポルトガル、トルコ、ペルシャなどの商人たちを中心に急激な発展が見られるようになる。その結果、これらの諸都市は、国際的貿易を権力の背景として内陸部の諸王国に対抗し、その独立性を強めていく。そのため、北部海岸地方の諸都市は海を媒介とした外国との交易を通して、商品のみならず、外来の言語、宗教、文化が交流するとい

う国際的な性格を帯びた文化伝統が形成されていく。その文化は、内陸部のヒンドゥ・ジャワ王国の厳格な身分制とは対照的に、一種の平等主義と寛容性に特色づけられていた。

チレボン (Cirebon)、トゥガル (Tegal)、プカロンガン (Pekalongan)、スマラン (Semarang)、クドゥス (Kudus)、ジュワナ (Juwana)、ラスム (Lasem)、グルシ (Gresik)、シドアルジョ (Sidoarjo)、モジョクルト (Mojokerto)、あるいはマドゥラ島 (Madura) などの北部海岸の諸都市は、各々がその地方特有の個性的なバティックを制作する中心地 (センター) であり、ヒンドゥ・ジャワ王国の中心地であったスラカルタ (Surakarta—現ソロ) やジョグジャカルタ (Jogjakarta) とは、そのバティックの伝統が明確に異なっていた。とりわけ、これらのバティック・センターはその地理的要因から内陸部のセンターに比べると、はるかに新しい考えを取り入れることに柔軟であった。このように、この地方の各センターでは、外来文化の影響を積極的に受け入れながら、その地域固有の色彩やモチーフによる独自のバティックを生み出していった。

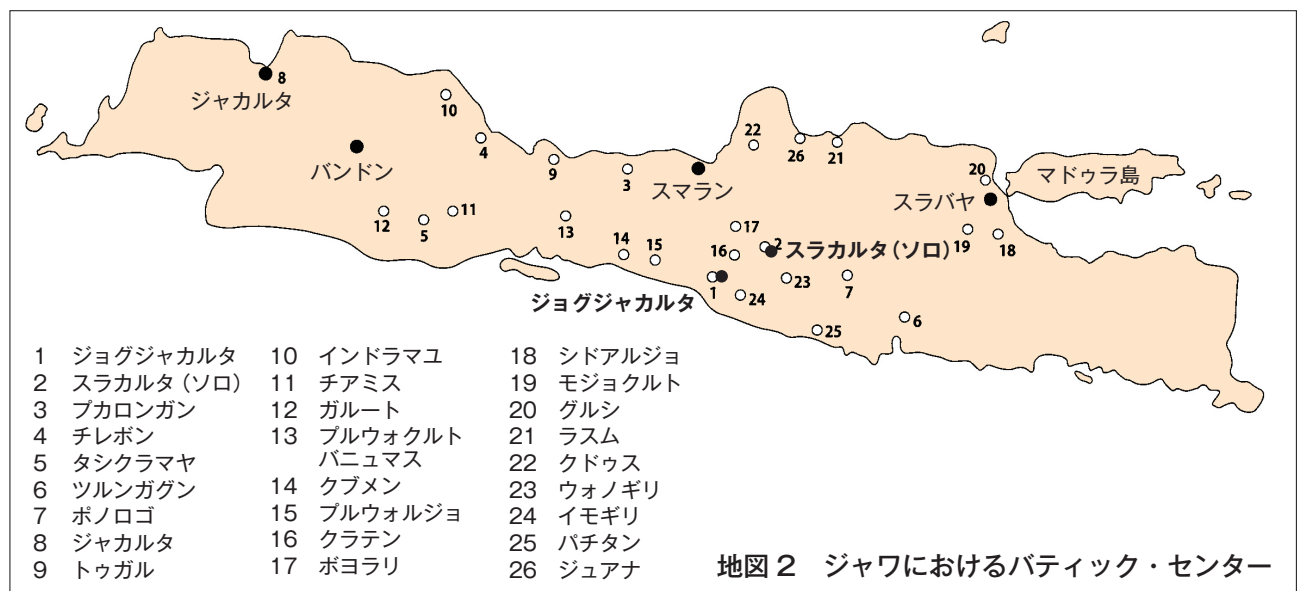
とくに 17 世紀から 18 世紀にかけて、かなりの

華僑勢力がこれらの諸都市に進出するようになったため、この地方におけるバティックの文様や色彩には中国文化の影響が強く見られるようになる。たとえば、ラスムで制作された茜色 (赤) のバティックは若い女性たちに人気を博し、その流行は北部海岸地方の全体に及んだ。

(2) バティック革命とジャワの一体化

伝統的なバティックの制作技術は、チャンティン (Canting) という筆による手描き (Batik Tulis) を基本としていたため、複雑なプロセス (11 工程) を要し、1 枚のカイン・パンジャン (巻型腰衣) やサルーン (筒型腰衣) を作るのに通常 2~3 ヶ月を要したため、その製品は庶民にとって非常に高価なものであった。そのため、19 世紀の後半でも、日常着としてバティックを着用していたのは、まだ貴族階級と豊かな商人階層の人々のみという状態であった。

20 以上に及ぶジャワのバティック・センターは、前述したように、ヒンドゥ・ジャワのプリアイ (貴族) 文化を反映した内陸地方と、外来文化の影響の強い企業家精神に富んだ北部海岸地方とに大別する



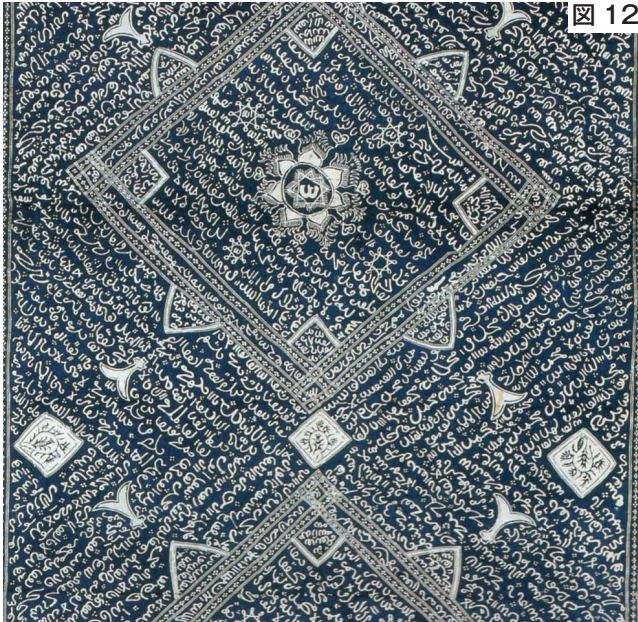


図 12

図 12. イスラム教徒用のアラビア文字によるカリグラフィのバティックである。



図 13

図 13. 中国系の人々に対する祭壇布として制作されたバティックである。

図 14. 中国の伝統柄である雲文様のモチーフは、ジャワでも豊かさのシンボルとして使用されてきた。



図 14

ことができる。内陸地方の文化は伝統主義的な傾向が強く、反オランダ的で経済的利益の追求を蔑視するのに対して、北部海岸地方の文化は、イスラム的であるとともに西欧的な考え方にも寛容で、経済的利益の追求も尊重した。したがって、19世紀に入って、オランダの植民地支配がより一層資本主義的性格を帯びてくると、そのような社会変化にいち早く対応したのは、北部海岸地方であった。

北部海岸地方のバティック企業家たちは、新しい状況に対応する方法として、バティックの制作について、二つの点で大きな成果をあげた。

第1の方法は、化学染料の導入である。ヨーロッパから輸入されてきた化学染料の使用によって、染料製作の工程を大幅に短縮できた。さらに新しい色彩が導入されたことで、伝統的なバティックが持ち続けてきた共同体の文化的要素をますます薄める結

果となった。

第2の方法は、バティック・チャップ (Cap) の登場で、それはバティックの制作方法のみならず、バティック全体にわたる文化的革命ともなったのである。このチャップは、1850年頃から登場してくるが、それは文様の刻まれた銅製のスタンプで、それまで用いられてきたチャンティン (Canting) という筆でいちいち描いていかななくても押すだけでよい。そのため、著しい期間の短縮となり、職人も熟練工でなく単純労働者で十分に勤まることとなった。

このような新しい方式の工場による製作が行われた結果、製作工程の簡易化、製作日数の大幅短縮、職人の大量供給や商品の大量製作が可能となった。そのためバティックの価格は大幅に下がり、ジャワ島全体の需要の拡大と海外への輸出の拡大を一蹴にもたらすこととなった。

化学染料とバティック・チャップの登場による商業化と市場の拡大は、特定の地域的、文化的背景をもった小さなバティック・センター（共同体）の領域を超えて拡大していった。とくに、1870年から1880年にかけて、鉄道と道路が輸入商品の輸送を目的としてジャワの広範な地域に開通するのであるが、これは一方でバティック・チャップを中心とする大量のバティック製品を、急速にジャワ全土に広げていくこととなった。そして、この変化は鉄道や道路のジャワ全土への開通と相俟^{あいま}って、長い間、孤立してきたジャワの各共同体社会を相互に結びつけ、ジャワ世界を一体化させるという文化的共通基盤を形成する要因ともなったのである。

内陸部のバティックは、元来その伝統の中で各々の文様にある特別の意味と目的をもって着用されてきた。しかし、ジャワ全体への流通の拡大はバティックの文様の深い意味を理解できない他の地域の消費者によって、単に彼らの美的な基準やその好みだけで着用されることを意味した。このようなジャワ全体への商業化と大衆化の進展は、内陸部のバティックに大きな文化変容をもたらす重要な要因ともなったのである。

(3) オランダ領東インド帝国の完成とバティックの大衆化

商業化に伴うバティックの変容とその流通空間の拡大は、19世紀から20世紀にかけてのオランダ領東インドという植民地国家の完成と無関係ではない。植民地国家の完成の過程は、ヒンドゥ・ジャワ王国の内陸部と北部海岸地方という二つの異なった政治的、文化的世界を解体し、オランダ領東インドという新しい政治空間に再統合するという過程であった。このことは、人々が移動し、交流する空間、あるいはその伝統的な民族文化の流通する空間を、それまでの地域共同体やジャワ島という狭い枠を超えて、オランダ領東インドという新しい政治空間に拡大していくことを意味していた。その結果、20世紀に入ると、バティックはジャワの民族文化

のシンボルとしての枠を超えて、新しい政治空間に拡大する兆候が現れたのである。

19世紀後半から始まったバティック制作の近代化によって導入された化学染料はそれまでになかった豊かな色彩のバティックの制作を可能とするようになった。そのため、プカロンガン、チレボン、ラセム、クドウスなどの、北部海岸地方におけるオランダ人、中国人、アラブ人の経営する規模の大きい工房では新しいモチーフと色彩感覚によるレベルの高いバティックが数多く制作されるようになる。たとえば、オランダ人工房ではヨーロッパへの輸出を目的として、赤頭巾や白雪姫などヨーロッパの童話をモチーフとしたものや、飛行機、汽車、船や兵隊など新しい時代の風物を描いたものなどが制作された。中国人工房では、彼らのノスタルジアから中国の伝統的な風物やデザインをモチーフとしたものが数多く制作された。アラブ人工房では、よりイスラムに適合させるために動物や人像^{ひとがた}文様を排除したモチーフが制作された。しかし、20世紀初頭から何よりも数多く制作されたのは、「花更紗」として知られる美しい花束（ブーケタン）のモチーフであった。このモチーフを最高の技術で表現して有名になったのが、プカロンガンのオランダ人工房ファン・セーレン（E.V. Zuylen）とクドウンウニ（Kedoengwoeni）村の中国人工房のオイ・スー・チョン（Oey Soe Tjoen）である。20世紀に入るとジャワ島以外のスマトラ島のジャンビヤパレンバンあるいはスラウェシ島のマカッサルなど外島のバティック消費地から、その地方特有のモチーフや色による質の高いバティックの注文が北部海岸地方に大量に寄せられるようになった。

1920年代に入ると「トコ・ジュパン」と呼ばれた日本人商店が、そのサービスの良さでジャワの庶民から人気を集め、最盛期には800店ほどに達した。その中には沢部磨瑛男が開いた「トコ・フジ」のように、レベルの高いバティックを制作する店も出現した。この時期には、富士山、芸者、扇子など、日本をイメージしたバティックが数多く制作された。



図 15

図 15. オランダ人のファン・セーレン工房で制作されたブーケタン(花束)文様のバティックは、その技術の高さと美しさで、バティック業界に大きな影響を与えた。



図 16

図 16. スエズ運河が 1869 年に開通すると、次々とヨーロッパから近代化の波が押し寄せたが、その風景を描いたバティックである。

図 17. 1941 年から始まった日本軍政下で着物柄をモデルとして制作されたバティックは、ホーコーカイ・バティックと呼ばれて、その美しさで人気を集めた。



図 17

とくに、1942 年からインドネシアが日本軍政下に置かれた中で制作された「ホーコーカイ・バティック」(「ジャワ奉公会」から名付けられた)はその美しさで注目を集め、現在まで制作され続けてきた。しかし、日本軍政という戦時体制においては、輸出入が一切ストップしたため、バティック業界は大変な苦境に追い込まれたのである。(図 12～17)

一方、日本軍政の下でジャワの各王宮(王侯貴族)も大きな経済苦境に陥り、そのため手持ちの貴重なバティックを庶民の間に売りに出さざるを得ない状況に追い込まれた。王侯・貴族専用の伝統的な禁制文様はジョグジャカルタ王宮のハムンクブオノ 9 世の下で、ここに初めて一般庶民にその着用が許されることになったのである。この決定によ

て、一般庶民が禁制文様のバティックを着用することが、ジャワ社会全体のブームとなる。また、バティック・チャップによる安い価格のバティックによって、「下層階級の人々が上流階級のスタイルを真似る」ということが幅広く庶民の間で流行するようになる。このことは伝統的な身分制がますます曖昧なものになっていくことを意味すると共に、王宮バティックの文様が保持し続けてきた神秘性や、その哲学的意味の形骸化を押し進めることとなった。

ここに、ジャワの王宮の権威のシンボルとして成立したバティック文化は、一般大衆の文化へと大きな変化を遂げることになったのである。それは、オランダ領東インドという政治空間を基盤として新しく登場してくる主権国家インドネシアの国民という

観念と結びつくための重要な布石となる。

4. インドネシア共和国の誕生とバティック・インドネシアの成立

(1) 初代大統領スカルノの民族文化政策とバティック・インドネシアの創造

スカルノは日本軍政下の1945年6月1日に開催された独立準備委員会で行ったパンチャシラについての演説でつぎのように述べている。「インドネシア民族主義を、第一の原則として採用しようではないか。完全なインドネシア民族主義とは、ジャワの民族主義でもなく、スマトラの民族主義でも、ボルネオ、セレベス、バリその他のいかなる民族主義でもなく、それらのものが一丸となった単一国家の原則となるインドネシア民族主義である」。彼が作り出した政治哲学である「パンチャシラ (Panca Sila—建国五原則)」は、1945年憲法の前文として採択されるのであるが、この原則はインドネシアの国家理念である「ビンネカ・トゥンガル・イカ (Bhinneka Tunggal Ika—多様性のなかの統一)」というジャワ古来の哲学を基礎としたものであった。それは、インドネシアの各民族が培ってきた多様な伝統的・文化的価値を積極的に肯定することで民族間の調和を図りながら、しかもなおその上に、インドネシア共和国の基盤に立った民族 (国民) を創出しようという意図に根ざしていた。

スカルノは「ビンネカ・トゥンガル・イカ」が単なる御題目 (実質的内容を伴わない^{たてまえ}建前や原則の主張) になることをさけるため、その具体化の代表的な事例として、当時すでに外島の一部にまで広がりを見せていたジャワを代表する服飾文化としてのバティックに注目し、強力な指導力によってそれを国家レベルにまで高めようとしたのである。

ナショナリスト・スカルノにとって、民族文化もまたネーション・ビルディングという最大の政治課題に対して、その役割を担うべきであった。これ

が45年憲法32条に規定された「政府はインドネシアの民族文化の高揚を図る」という短い文章の意味するところであった。そこでスカルノは、ジャワ固有のバティックをインドネシア全体を代表するバティックにするために、ジャワ古代王国の伝統を受け継いだ王宮文化のシンボルである文様と外来文化の影響を受けた北部海岸地方特有の明るい色彩とを融合させることによって、ジャワの伝統的な文化的要素 (ヒンドゥ・ジャワ世界独得の価値観) を極力薄めようと考えたのである。

スカルノの指導の下、ジャワ文化に精通していたハルジョナゴロ (Harjonagoro) によって創作された、この新しい「バティック・インドネシア」は、ジャワ中心主義に反対する外島の民族世界の人々にも次第に受容されるようになっていく。スカルノによるこの「バティック・インドネシア」の創造は、「新しいインドネシア共和国における統一への希望の表現」といえるものであった。これを契機に新しい感覚のバティック・インドネシアがつぎつぎと生み出された。(図18～20)

スカルノは、「バティック・インドネシア」の創造を成功に導くため、バティック産業を保護し育成するためのナショナリズム政策を強力に押し進めた。そのひとつは、1950年代に急激に増加していたイミテーション・バティックに対して輸入制限を行うことであった。また、バティック調査センター (Balai Penelitian Batik dan Kerajinan) において、新しい色彩やデザインの研究を進め、各企業に対してその普及活動を始めた。さらには全国の小学校・中学校・高等学校の制服としてバティックのシャツを採用するように指導するとともに、公務員にもバティックの着用を義務づけたのである。このような様々なスカルノの民族服政策は大きな成果をあげ、全国の津々浦々^{つづうらうら}で開かれる村の小さな儀礼から、ジャカルタでの盛大な国家的儀礼に至るまで、女性はバティック・クバヤ (Batik Kebaya) を、男性はバティックのシャツ (Hem Batik) を積極的に着用するようになり、インドネシアの社会的一体性と



図 18



図 19



図 20

図 18. スカルノの依頼によって制作された「バティック・インドネシア」である。伝統的モチーフと北部海岸の色彩の融合は人々に大きな希望を与えた。

図 19. 図 18 の部分拡大図

図 20. これは日本の着物の帯として、黄金のシルクで制作された現代バティックである。

国民統合の進展を内外に強く印象づけることとなったのである。

「ビンネカ・トゥンガル・イカ」という国家理念の下でスカルノによって展開されてきたバティック政策は、スカルノ以後の各大統領によって現在まで積極的に受け継がれてきた。1995年、ジョグジャカルタ郊外のバティック・センターであるイモギリ (Imogiri) で調査を行った時、政府がバティック業者に行っていた政策は、「色は変えても良いが伝統色モチーフはそのまま維持せよ」ということであった。スカルノの政策は守り続けられていたのである。今では、大統領を始めとするインドネシアの指導者層も自分の出身民族を超えてバティックの服装を着用することが普通となっている。まさにジャワのバティックはインドネシアのバティックへと変容

を遂げ、インドネシアのナショナル・コスチュームとしての地位を獲得していくことになる。

1994年11月、ボゴールで開催されたAPEC首脳会議の最終日、クリントン米国大統領や日本の村山首相を始めとした各国首脳全員が、王宮文様の絹のバティックのシャツを着用して登場し、世界にインドネシアのバティックの存在を改めて強く印象づけた。このことが先例となって、その後のAPEC首脳会議では、開催国の伝統服飾を着用することが恒例となっている。

(2) 「インドネシアの文化遺産」から 「世界の文化遺産」へ

インドネシアの経済発展は、1990年代に入ると都市を中心に大きな社会変化をもたらすようにな

り、人々のライフスタイルも急速に現代化するようになる。大都会では高層のビルが林立し、道路は車で溢れている。次々と建設される巨大なショッピングモールは、どこも買物や食事を楽しむ人々で賑わっている。このような消費文明の進展はバティック界にも大きな影響を与えるようになった。

その第一は、新たな絹のバティックの登場である。消費文明の波を受けて、有力なバティック・デザイナーたちが次々と新しい感覚の魅力的な絹のバティックの制作に挑戦し始めたのである。第二は、バティックの流通の拡大が全国規模になるに従って、外島の島々で長い間その民族によって作られてきたイカットなどの伝統的なモチーフをバティックのデザインとして取込むことで、その地方独自のバティックが制作されるようになってきたことである。もし、この動きが外島全体に広がっていけば、「バティック・インドネシア」は民族間に調和をもたらすインドネシアの国民文化としてさらに大きな発展を遂げると共に、その文様の広がりやバティック・インドネシアに新しい革命をもたらす可能性さえある。第三としては、バティックを中心とした伝統工芸の大規模な「博覧会 (Pameran)」が政府主導型で頻繁に開催されるようになってきたことである。そこでは、バティックのファッション・ショーがよく開催されており、どの会場も大変な活気にでぎわっている。

バティック・インドネシアの新たな発展は、インドネシア人による自らの伝統文化の「再発見」と、その芸術美に対する「再創造」の高まりを表している。それはバティックが、まさにインドネシアを代表する重要な「国民的文化遺産 (Warisan Budaya)」であることを人々が強く認識した結果に他ならない。

2009年10月2日、インドネシアのバティックは国連教育科学文化機関 (ユネスコ) によって「世界無形文化遺産」に認定された。服飾としては世界で最初の認定であった。それを記念して開催された「世界バティック・サミット」には私もスピーカー

として参加していたが、会場はインドネシアのバティックが世界から高く評価されたことに対する大きな喜びで大変な熱気に包まれていた。挨拶を行ったユドヨノ大統領は「インドネシアはバティックの国である」と宣言し、この日を「バティックの日」として国民にその着用を義務づけた。それは、「バティック・インドネシア」が世界に誇る「国民文化」であることを政府が公式に認定したことを意味した。

多民族国家において、ある特定の民族の伝統文化が国民統合という政治的役割を担う文化にまで発展を遂げたというのは、世界的に見ても非常に珍しいことである。しかも、国民の大多数が信仰している宗教 (イスラム) とは全く異なったヒンドゥー・ジャワ王国の王宮内でその古典は形成されたのである。

以上考察してきたように「バティック・インドネシア」の成功は、世界最大の多民族国家インドネシアにおける国家理念「多様性のなかの統一 (ビンネカ・トゥンガル・イカ)」の方向性と可能性を見事に示した事例と思われる。

主要参考文献

- Geertz, C. (1960) "The Religion of Java" The Free Press
- スカルノ (1965) 日本インドネシア協会訳『インドネシア革命の歩み—スカルノの大統領演説集—』日本インドネシア協会
- Sylvia Fraser, Lu (1986) "Indonesian Batik" Oxford University
- Nian S, Djumena (1990) "Batik dan Mitra" Penerbit Djambatan
- 土屋健治 (1986) 「政治文化論」『年報政治学』 岩波書店
- 吉本忍 (1996) 「ジャワ更紗」平凡社
- 戸津正勝 (2007) 「バティック・インドネシアの成立過程」『インドネシア更紗のすべて』 朝日新聞社
- Tozu, Masakatsu (2009) "The Meaning of Indonesian Batik as World Heritage" Indonesia Global Home of Batik World Batik Summit